カフェーの女給

『祈り』はどこにあるのか

川田忠明

――「国の名誉」を汚すのは誰か――

「大正ロマンの美人画家」として知られる竹久夢二。世紀末的なデカダンスと郷愁を誘う現代版浮世絵ともいうべき作風には、今も根強い人気がある。一九九〇年には竹久夢二美術館（東京・文京区）も開館している。

彼の作品に現れるのは、洋装の「モダンガール」、女学生、そして「職業婦人」など、社会に登場しつつあった新しい女性たちだ。そのスタイルが若い世代の憧れを誘った。なかでも白いエプロンを身に付けた「カフェー」の女給は、誰もが目にしたことのある「大正ロマン」の代表的イメージの一つだろう。

明治末期に日本に登場した「カフェー」は、パリのそれのように、芸術家や文士たちが集い、議論するサロンをめざしたものだった。だが、関東大震災（一九二三年）を節目として、この「カフェー」は、性風俗産業へと変貌していく。女給たちはエプロンを取り去り、客との密着度を高めるために、生地の薄い着物を着るようになった。テーブルの下にかくれて、性的な「個別サービス」などが「別料金」で行なわれ、店の二階に特別に部屋をかまえて、売春を行なう店もあった。

「密売淫」の検挙数は、一九三一年から三四年まで毎年約四百件にものぼり、営業停止処分の店も相次いだ。それでも勢いはとどまらず、東京の女給は、一九三一年には二万三千人へと急増した。娼妓の三倍以上、芸妓の二倍以上である。

この背景には、昭和恐慌（一九二九年）後の格差の拡大、労働力の「調整弁」としての女性の位置、さらには「満州事変」勃発（一九三一年）などが絡みあっているが、特に指摘したいのが、女性の「性売買」を公認する――公娼制度に対する政治の姿勢だ。

ヨーロッパとその植民地（東南アジア）ではすでに一九二〇年代に、公娼制度は廃止されていた。しかし日本は、国内でそれを維持するばかりか、一九一〇年代以降は、台湾、朝鮮、そして中国の支配都市に、公娼制度を「輸出」していったのである。一九三一年には、国際連盟東洋婦女売買調査団が来日し、日本政府に公娼廃止を促したほどである。この後進性こそ「カフェー」を繁殖させる要因だったといえる。

それは、日本軍「慰安婦」を産み出す土壌でもあった。「公娼はどこの国でもあった」などと問題の本質をすりかえた議論が一部にある。だが、その「思考回路」の根本にあるのは、公娼を認め、植民地に拡散した時代と変わらぬ、人権と性愛にたいする誤った認識だ。このことへの無自覚と未清算こそ「我が国の名を汚す」真に恥ずべきものではないのか。

（日本平和委員会常任理事）